



Title	日本語教育のための漢字語彙の日中対照研究―初級名詞の分析―
Author(s)	小室リー, 郁子
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/70698
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (小 室 リ ー 郁 子)

論文題名 日本語教育のための漢字語彙の日中対照研究—初級名詞の分析—

本研究は、中国語を母語とする日本語学習者（以下、NCS）が母語知識を活かして漢字語彙学習を行うには、何が問題となりうるかを明らかにしようとするものである。

かつて漢字圏の学習者といえば、漢字圏に在住する者か、その地域から日本に留学する者かを指すことが多かったが、グローバル化が進む現在、NCSは世界中に散らばり、彼らもまた母語の中国語の知識を日本語学習に活用できる「中国語を母語とする日本語学習者」と位置付けられる。本研究が扱うNCSは、そのような学習者を含んでいる。日本語教育のための漢字語彙の日中対照研究は、外国語として日本語を学習するNCSが何を学ぶ必要があるかという問いに対して、具体的な答えを提示するためのものでなければならない。そのためには、対照研究を通じて、NCSが母語知識を活用できることと、活用できないことを特定する必要がある。本稿は、NCSにとって必要なのは、彼らがすでに母語で習得している漢字という文字の教育ではなく、漢字で表記される漢字語彙の教育であることを提唱し、日本語の漢字語彙の何を扱う必要があるかを明らかにするための基礎分析である。

本研究は、従来の漢字語彙の日中対照研究と、以下の三点で異なっている。

＜本研究と従来の漢字語彙の日中対照研究との違い＞

- (1) 分析対象として、漢字二字から成る漢語だけでなく、漢字表記の和語や漢字一字から成る語を含んだ点
- (2) 漢字や漢字語を、認識・理解する際に問題となる点と産出時に問題となる点を分けて扱い、その差異に基づいて漢字および漢字語彙の分類を行った点
- (3) 辞書の記述からだけでなく、中国語母語話者に対して実施した漢字・漢字語彙の認識および使用実態の調査結果から、NCSの母語知識を把握・特定しようと試みた点

本稿は以下の7章から成る。

- 第1章 中国語を母語とする日本語学習者への漢字・漢字語彙教育に関する先行研究
- 第2章 漢字・漢字語彙学習に関する中国語を母語とする日本語学習者の意識
- 第3章 本稿における漢字語彙分析の概要
- 第4章 表記に関する分析と分析結果
- 第5章 読みに関する分析と分析結果
- 第6章 語義用法に関する分析方法
- 第7章 語義用法に関する分析結果

第1章では、中国語を母語とする学習者への漢字・漢字語彙教育に関わる先行研究のうち、日中対照研究と習得研究について概観し、NCSに対する漢字語彙教育のために必要な語彙分析について考察した。

日中対照研究では、まず、漢字語彙分類と日中同形語の対照研究について取り上げ、いずれの研究も分析対象が主に漢字二字以上から成る漢語（字音語）に限られ、和語や、漢字一字で表記される語の多くが研究対象とされていないことについて指摘した。そして、日本語教育では和語、漢語の区別なく漢字表記の語を扱う必要があることから、和語や漢字一字で表記される語を含んだ漢字語彙全体を対象とした対照分析が重要であることを主張した。

さらに、先行研究における漢字語彙分類では、語が理解できるか否かという語義の異同に重点が置かれ、語の産出時に問題となりうる用法面の違いに焦点が当てられていないことを指摘して、教育現場では語の理解面だけでなく、産出面の特徴を把握する必要があることを述べた。

漢字語彙に関する先行研究では、日中で同形であるか否かを論じる際に、現在使用している字体・字形に違いがあっても、康熙字典体に遡って同じであると認められる文字については日中で「同形」と見なされる傾向にある。

また、日中間の字体・字形の違いは、文字の対照研究の中で扱われ、語彙研究とは切り離されている。しかし、漢字語彙教育においては、語の理解時に日本語で現在使用されている字体・字形が認識できるか、また語の産出時に語を適切に書くことができるかといった点が問題になるため、漢字語彙の表記に関する側面は、語の読みや語義用法とともに扱う必要がある。

習得に関する先行研究では、まず、漢字語彙習得に関する誤用分析を扱った研究を概観し、漢字語彙の語義、用法、表記に見られるNCSの誤用や非用の特徴から、NCSの漢字語彙習得には彼らの母語知識が大きく関与している実態が明らかにされていることを述べた。次に、第二言語習得における母語転移について取り上げ、NCSの漢字語彙習得では主に表記と語義用法において、母語知識の影響が観察されていることを言及した。語義について、小森他（2007、2008）は、『中国語と対応する漢語』（文化庁1978）でO語（Overlap: 日中両国語における意味が一部重なってはいるが、両者の間にずれのあるもの）に分類される語群は、日中の共有義とそれぞれの独自義とを区別して学習しなければならないことが、習得の難しさにつながっていると分析している。また、習得難易度が低いと考えられてきたS語（Same: 日中両国語における意味が同じか、きわめて近いもの）についても、小森他（2012）はコロケーションなどの用法面の違いが語の産出時に問題となりうることを指摘している。

これらの先行研究から、NCSのための漢字語彙教育には以下の三点が必要であると言える。

<NCSの漢字語彙教育に必要な点>

- （１）分析対象語として、漢語のみでなく、和語や漢字一字で表記される語を含み、漢字で表記されるすべての漢字語彙を扱うこと
- （２）漢字語彙の表記、読み、語義用法を扱い、語の理解時と産出時に問題となりうる点を特定すること
- （３）上記（２）の結果が、教育現場で使いやすいように整理されていること

第２章では、NCSが母語の中国語との比較において日本語の漢字をどう捉えているか、また学習時に漢字・漢字語のどの点に注意を払っているか等を知るために行った意識調査について述べた。学習者が捉えている母語と目標言語との距離の近さが母語転移に影響を及ぼす（Kellerman 1977、1978）という立場に立つと、NCSが中国語とよく似ていると思っている漢字や漢字語の特徴は、転移が起こりやすいと考えられる。したがって、NCSの注意を何に向けてればよいかを特定するには、漢字・漢字語彙学習に対するNCSの意識を知ることが有益となる。

調査は、カナダのT大学において漢字・漢字語彙学習を始める前のNCSを対象とした「学習開始前調査」と、漢字・漢字語彙学習を過去に開始し現在も継続中であるNCSを対象とした「学習開始後調査」の二種から成っている。

調査の結果、NCSには以下のような傾向のあることが明らかとなった。

<NCSに対する意識調査の結果>

- （１）漢字の形：日本字体と繁体字をよく似ていると思っており、学習時に漢字・漢字語彙の表記に対しほとんど注意を向けていない。
- （２）漢字の音（漢字語の読み）：日本語と中国語は、どちらかというとき似ていないと思っており、漢字・漢字語の読みに注意を払って学習を行っている。また、漢字・漢字語彙の読みの学習を難しいと感じている。
- （３）漢字の義：日本語と中国語は、どちらかというとき似ていると思っており、学習時に漢字語の語義に対しあまり注意を向けていない。

この結果から、教育現場では、漢字語の表記・語義に関して日中で差異が認められる場合は、まずNCSにその差異に気付かせ母語とは異なるという意識の下で学習を促すことが必要で、漢字語彙の基礎研究は日中の違いを網羅し、かつ詳細に記述したものでなければならないということが示唆された。

第３章では、本研究で行う漢字語彙分析の概要を述べた。第１章の先行研究と第２章の意識調査の結果を踏まえ、本稿では（１）～（４）に従って分析を行う。（１）と（２）は分析対象の選定に、（３）は分析方法に、（４）は分析結果の考察に関わる。

<本稿における漢字語彙分析の概要>

- （１）分析対象は、漢字を文字として単独に扱うのではなく、漢字語として扱う。

- (2) 分析対象とする漢字語彙は、漢字二字以上から成る語（以下、複漢字語）に加えて、漢字一字から成る語（以下、単漢字語）も含む。
- (3) 古い言葉やかたい書き言葉ではなく、日中で日常使用されている現代語における、漢字語彙の表記、読み、語義用法を扱い、表記と語義用法についてはその日中対照を行う。
- (4) 学習者の理解の側面と産出の側面に現れる問題点をいずれも考察する。

分析対象語としては、『日本語能力試験出題基準【改訂版】』（2002）の4級語彙表の中の、漢字表記の名詞（以下、4級漢字名詞）295語を選定した。4級語彙がNCSにとって最初に学習する日本語の漢字語彙であること、特に単漢字語に見られる多義・多用法の語の中国語との対応関係を分析・整理するには、語を品詞別に扱うことが適切だという理由からである。名詞は、単漢字語・複漢字語ともに4級漢字語彙の中で最も語数が多い（小室リー2015）ことから、4級漢字の特徴を大きく捉える上で適していると判断した。本研究では、漢字語彙の表記、読み、語義用法について、それぞれ、分けて分析を行い、そのうち語義用法については、単漢字語と複漢字語を分けて扱った。単漢字語は、同形の中国語が語の場合と語素（形態素）の場合があり、その点が、常に同形の中国語が語である複漢字語とは異なっているため、両者では日本語との対応関係に違いが見られるからである。

第4章から第7章では漢字語彙の表記、読み、語義用法に関する分析と分析結果を述べた。

第4章では、4級漢字名詞の表記、すなわち分析対象語295語の漢字308字について、まず辞書等の文字資料を用いて日本、中国、台湾・香港で使用される印刷字体を比較対照し、NCSが認識において問題のない文字と、問題となりうる文字の特定を行った。その結果、簡体字使用のNCSに、対応する繁体字の知識があり、また中国の文字との間に見られる字体差が微細である場合、308字のうち約96.1%の文字の認識が可能であることが明らかとなった。それに対し、NCSが産出時に問題がないと考えられる文字は、簡体字と共通する61.4%の文字に限られ、残る38.6%の文字は、中国語の文字とどこが異なるかを細部にわたって学習する必要がある。日中の字体差は、文字の図形的なデザインが大きく異なるもの（日/中の順、以下同様。例：窓/窗、駅/驛、塩/盐）から、偏旁に差異が規則的に表れるもの（例：銀/银と鏡/鏡、財/财と題/題）、点画の差異が微細なもの（例：線と線が交わるか交わらないか：鼻/鼻、角/角、写/写）があり、このような特徴に注意を向けた学習・指導が有効となる。

ただ、印刷字体の対応関係に現れない問題点として、NCSが認識できる文字は、必ずしも日中で字体差が小さい文字であるとは限らず、文字の図形的なデザインが大きく異なる文字でも認識が容易なものもあれば、点画の差異の大小に関わらず認識に困難を覚えるものもある。また、日本語で常用とされる文字の中には、現代中国語での使用頻度が低いためNCSにとって馴染みの薄い文字があり、これらは文字の認識・産出のいずれにおいても問題となりうる。そこで、日本語の知識のない簡体字使用の中国語母語話者（7名）をインフォーマントとし、彼らに対し分析対象の295語を日本字体で表記したものを提示して、文字や語が認識できるか否かを調べる調査を行った。その結果、1）簡体字を使用する中国語母語話者は、繁体字を使用することがなくても非常に多くの繁体字の認識が可能であるが、2）中国の字体あるいは繁体字と図形的なデザインの差が大きい文字だけでなく、字体がまったく同じ、あるいはよく似ている文字の中にも、人により認識に困難を覚えるもののあることが明らかになった。さらに、印刷字体ではなく、筆写時に現れる字形の特徴として、筆順の違いや筆写文字に特徴的な点画の向きや位置等があることを述べた。

第5章では、4級漢字名詞の読みに関する分析と分析結果について述べた。日本語教育では、日本語の漢字は原則として音訓二種類の読みがあり、中には二種類以上の読み方をする文字が存在すること、そして、その点が基本的に一字一音とされる中国語の漢字と異なっており、母語で漢字を使用するNCSにとっても日本語の漢字の読みは複雑で難しいと言われることが少なくない。しかし、実際には、日本語の漢字の中には、一字一音のものが多くあり、中国語にも複数の音を持つ文字が数多く見られる。日本語の漢字の読みの難しさは、一つの漢字を複数に読み分けなければならないと考えることにあり、漢字語彙の学習の中で、新たな読みを学べばよいと考えれば、一度に多くの読みを学習する必要がなくなり学習者の負担も軽減される。

そこで4級漢字名詞295語の漢字308字について分析を行った結果、複数の読み分けをする漢字は全体の16.6%（51字）で、残る83.4%の漢字については、初級前半では一字につき一つの読みを学習すれば十分であることがわかった。読み分けをする51字は、その半数以上が2種類の読み分けをする文字で、4種類以上に読み分ける文字はわずか4字となっている。ただ、NCSは、日本語の語彙を中国語の漢字表記と結びつけている場合がある。例え

ば、日本語ではairplaneを「ひこうき」ということは知っていても「ひこうき」という語を《飛行機》という表記とは結びつけずに、「ひこうき」という意味の中国語「飞机」という語と結びつけている。NCSに対する読みの教育では、このような点に対し注意が必要である。

第6章では、4級漢字名詞295語の語義用法に関する分析方法について述べた。

分析は二段階に分かれている。まず、準備段階として、分析対象の295語について分析する語義用法を特定した。語によっては多義・多用法のものがあるが、初級前半という語彙のレベル同様、語義用法についても、初級レベルで扱われるものを分析対象とした。

分析の第一段階では、以下の手順で、各漢字語の語義用法に関する日中対照、および語彙リストの作成を行った。

<第一段階>

- (1) 辞書の対訳や定義を対照し、日本語と、同形の中国語との対応関係、および日本語と同義同用法の中国語を特定する。
- (2) 中国語母語話者をインフォーマントとした1)と2)の調査結果と比較対照する。
 - 1) 中国語母語話者による語彙認識の実態を調べるための調査
 - 2) 中国語の語彙の使用実態を知るための調査
- (3) 上記(1)と(2)を資料とし、語義用法について詳細な語彙リストを作成する。
- (4) 先行研究における記述との異同を確認し、必要であれば修正を加える。

次に、第二段階として、以下の手順で漢字語彙の分類と考察を行った。

<第二段階>

- (1) 第一段階で作成した語彙リストをもとに、分類枠組みに従い、転用プラス(PT: Positively Transferrable)語、転用注意(CT: Carefully Transferrable)語、転用マイナス(NT: Negatively Transferrable)語、転用不可(Un-Transferrable)語の大きく4種類の項目に分類する。
- (2) 漢字語彙全体に対する各項目の占める割合について、単漢字語彙と複漢字語彙に分けて特徴を考察する。
- (3) 各項目に含まれる漢字語彙を特定し、項目ごとに考察を加える。

このうち、第一段階(2)の中国語母語話者をインフォーマントとした調査は、(1)の辞書の対照による分析を補足するために実施した。調査は、1)中国語母語話者による語彙認識の実態を調べるものと、2)中国語の語彙の使用実態を知るためのもの、の二種類から成る。

まず、1)母語話者による語彙認識の実態を調べる調査は、日本語学習歴のない中国語母語話者7名をインフォーマントとし、彼らが日本語と同形の語(中国の字体で表記した日本語漢字語彙)を見て、語として認識するか、そして理解可能な場合どのような解釈をするかを調べるために行った。これらの結果から、NCSが母語知識を活用させ、日本語の漢字語彙をどのように理解あるいは産出するかの、言うなれば、どういった母語転移の起こる可能性があるかを調べた。一方、2)中国語の語彙の使用実態を調べる調査は、日本語と語義が対応する中国語の用例文から、語が使用される文体、語の品詞やコロケーション、類義語がある場合の使い分け等を調べた。用例文は、中国語を母語とするインフォーマント4名が、あらかじめ日英で用意された文や句を、英語をもとに中国語訳を行って作成した。これら1)と2)の二種類の調査結果を、母語話者の使用実態の傾向を示す資料として辞書を用いた分析結果と比較対照した。

第二段階の分類の枠組みは、母語転移を「学習者の意識的なストラテジー」(Kellerman1977)と捉え、学習者による意識的な母語知識の活用を「転用」という語で表して、母語知識を目標言語の理解と産出に活用できるか、母語知識の活用が正の転移につながるかを分類基準とした4分類となっている。PT(転用プラス)語は積極的に転用が促せる語群、CT(転用注意)語は転用は促せるが注意が必要な語群、NT(転用マイナス)語は転用が負の結果をもたらす語群、UT(転用不可)語は転用そのものが無理である語群である。CT(転用注意)語については、さらに注意を向ける点の違いによって三つに下位分類される。

第7章では、4級漢字名詞295語のうち、位置・時に関する12語を除いた283語を、単漢字語と複漢字語に分け、

それぞれPT（転用プラス）語、CT（転用注意）語、NT（転用マイナス）語、UT（転用不可）語に分類した結果と考察を述べた。位置・時に関する12語は、他の名詞と異なり、単語レベルでの分類では語の特徴を把握しにくいと判断し、4分類には含めず分析結果を述べた。

分類の結果、4級単漢字名詞には以下のような特徴のあることがわかった。

< 4級単漢字名詞の特徴 >

- （1）語の理解面：理解可能な語は、全体の85.5%（94語）を占めており、NCSにとって、単漢字名詞の理解はほとんど問題がないと考えられる。
- （2）語の産出面：負の転移が予想される語は、全体の70.0%（77語）あり、NCSにとって、かなり多くの単漢字名詞が産出時に問題となりうる。
- （3）単漢字名詞は、CT（転用注意）語の割合が55.5%で、4類の中で最も高い。CT語は語の理解にはあまり問題がないが、産出時には注意が必要であり、CT語の多さが、単漢字名詞の難しさの大きな要因となっている。一方、複漢字名詞で最も数の多いUT（転用不可）語は、単漢字名詞では非常に数が少ない。

それに対し、4級複漢字名詞には、以下のような特徴のあることがわかった。

< 4級複漢字名詞の特徴 >

- （1）語の理解面：理解可能な語は、全体の44.0%（76語）で、単漢字名詞と比べると少ない。複漢字名詞の理解時には、NCSが注意を向ける必要のある語が多い。
- （2）語の産出面：負の転移が予想される語は、全体の72.7%（126語）ある。この割合は、単漢字名詞とほぼ共通しており、NCSにとって、かなり多くの複漢字名詞が産出時に問題となりうる。
- （3）複漢字名詞は、4類の中でUT（転用不可）語の割合が最も高い。これらは中国語に同形の語がなく、NCSがゼロから学習する必要のある語群である。一方、単漢字名詞で最も数の多いCT（転用注意）語は、複漢字名詞ではそれほど多くない。

以上が、本稿の分析から得られる結果である。各語についての詳細な分析結果は、巻末資料として添付したので御参照いただきたい。

本研究は、NCSの母語知識に配慮した漢字語彙教育を行うために必要な基礎研究の方法を提示し、4級漢字名詞を対象に、具体的な分析を行った。NCSの母語知識を活用するには、NCSが持つ知識をできる限り正確に把握することが分析の出発点となる。

ただ、NCSの母語知識は、中国語に関する言語学的な知識から、古典および専門語の知識等に至るまで、彼らの年齢、性別、居住地、生活環境、日本語や日本文化との接触の程度等によって大きく異なり、学習者が多様化している現代においては、均一な学習者を想定して、これがNCSの母語知識だと言えるものを特定することは難しい。しかし、より多くの事例を集め、NCSが理解や産出に困難を来している背景を分析することで、語の理解時あるいは産出時に何が起こりうるかを示し、その汎用性を高めることができる。その観点から、本研究には二つの課題が残されている。

一つは、本研究では中国語母語話者をインフォーマントに用いた調査をいくつか行ったが、いずれも被験者の数が少なく、またインフォーマントの年齢や性別、出身地域等にも偏りがあった。今後、さらに多様な母語話者のデータを集める必要がある。また、日中両言語における語の使用実態については、使用される語義、語が使用される文体、語に特徴的なコロケーション、さらには語義用法による使用頻度の違い等について、インフォーマント調査からだけでなく現代語の話し言葉コーパスを用いて調べる必要がある。

もう一つは、本研究では、分析対象を4級漢字名詞に絞ったが、今後分析対象語のレベルと品詞の種類をさらに広げていく必要がある。異なったレベルや品詞の分析が進めば、分野別に語彙を整理したり、作文辞典のような教材開発に発展させることも可能となるだろう。

教育現場で扱う日本語が実際の言語使用に沿ったものであるためには、教育のための基礎研究は言語使用の実態が反映されていることが何よりも重要であり、本研究が示したのは、そのための基礎分析の方法と具体的な漢字語彙の分析結果である。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (小室リー 郁子)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	筒井 佐代
	副 査	教授	真嶋 潤子
	副 査	教授	古川 裕
	副 査	大阪大学名誉教授	小矢野 哲夫
	副 査	元大阪大学教授	鈴木 睦

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語と中国語の漢字語彙の対照分析を行い、中国語を母語とする日本語学習者（以下、NCS）が母語知識を活かして漢字語彙を学習しようとする際、何が問題となりうるかを明らかにするための研究方法を提唱した、先駆的かつすぐれて有用な研究である。漢字圏の学習者であるNCSは、漢字という文字に関する知識は有しているため、本研究は、NCSにとって必要なのは文字そのものの教育ではなく、漢字で表記される漢字語彙の教育であることを主張し、NCSに対する日本語の漢字語彙教育の指導項目や留意点を明らかにするために、旧日本語能力試験4級漢字名詞295語の表記、読み、語義用法について、日本語と中国語の詳細な対照分析を行っている。日本語の漢字語彙と中国語の漢字語彙を、一語一語辞書等を用いて対応を確認し、その対応関係を明らかにすることに加えて、中国語母語話者に対してそれらの語彙の使用に関する実態調査を行ってNCSの母語知識を把握・特定した上でNCSの学習上の困難点を探るという作業は、膨大な時間と労力を要するものであり、未だかつてそのような研究は行われていない。本研究の独自性は、この作業において、先行研究で扱われてきた漢字二字から成る漢語だけでなく、漢字表記の和語や漢字一字から成る語を含んだ点、また漢字や漢字語を認識・理解する際に問題となる点と産出時に問題となる点を分けて扱い、その差異に基づいて漢字および漢字語彙の分類を行った点にある。その結果、字形については、繁体字の知識があれば漢字の認識にはほとんど問題がないが、産出には問題が生じること、漢字の読みについては、NCSは学習に困難を感じているが、4級漢字名詞では複数の読み方の漢字は少なく、負担はそれほど大きくないこと、語義用法については、中国語との対応で4種類（転用プラス語、転用注意語、転用マイナス語、転用不可語）に分類し、理解可能であっても産出に負の転移が予想される語が多いことを指摘した。これらの対照分析の結果は大部の資料としてまとめられており、この資料自体が漢字語彙教育を刷新するための基礎資料としての価値を有している。本研究の分析結果は、日本語教育に携わっているだけでは気づくことのできない様々な有用な示唆を含んでおり、効果的な日本語教育を行うためには、言語の対照分析という基礎研究が必要であることを改めて実証的に示す、大変意欲的な研究である。さらに、日本語教育のみならず、日本語母語話者に対する中国語教育にも応用可能な研究である点も大いに評価できる。

本論文の試問は、2018年6月14日（木）16時30分から18時30分まで、箕面キャンパス学術交流室において、上記の5名の審査担当者により行った。まず、小室リー氏から、論文の内容について25分程度のプレゼンテーションが行われた。プレゼンテーションは、本研究の意義が明確に理解できるような論理的かつわかりやすいものであった。その後の質疑応答では、審査担当者から、主として以下のような質問や指摘がなされた。

1. 研究方法について

- ・NCSの多様性をどのように考えているか
- ・インフォーマント調査のインフォーマントの選び方は適切であったか
- ・分類の基準が妥当であるか
- ・「字体」「字形」の用語が混乱しているのではないか

2. 分析結果について

- ・4級漢字語彙の中に、日本語母語話者があまり漢字で書かない語彙や日本語母語話者がほとんど使用しない語彙があることに留意するべきではないか

- ・名詞以外の品詞を分析した場合、今回と同様の分類が可能なのか
- ・読みと字体に関しては、もう少し深い分析ができるのではないか
- ・字体はどこまで正確に書かせる必要があると考えているのか
- ・4級漢字語彙を的確に学んでいれば、3級の学習はスムーズになるのか
- ・実際の指導の際には語彙の重要度により軽重をつけるべきではないか

これらの質問や指摘に対して、小室リー氏は誠実かつ真摯に対応し、必要な説明や解説を加えるなどしながら、いずれも的確な応答を行い、審査担当者を十分に納得させることができた。

以上、本論文が先駆的かつ独創的で有意義な研究であり、日本語教育のための基礎研究として高く評価できること、また試問において十分に説得力のある議論を展開したことにより、論文審査担当者一同は、本論文を博士号を授与するにふさわしい優れた論文であるとして、博士論文の成績を合格と判断した。